

花の歌 歳時記

前田康子

子供が絵日記を描いている。今日一日を思い出すということは、子供にとって、大変なことらしい。その時思いついた怪物や、迷路を描いて終わっていたりする。よほど刺激的な楽しいことが起こった日は、それを自ら描きたがる。雪でかまくらを作ろうとしたり、クッキーを焼いてみた日のことを。

思えば、自分も同じように、絵日記に描くことがなく、白い紙を前に坐すわっていたことがあった。冬は何もない。空を見ても上手の道を歩いても。そんな時母は決まって、「木の枝の芽をみてきてごらん。芽は大事なんだよ」と言った。

外に出て、桜や柳の枝に小さく並んだ芽を見る。何も思わなかった。動かない地味なそれが春にはふくらみ、花や葉になるとわかっていても。帰ってきてても、やっぱり何も描けずぼーっとしていた時間を思い出す。二十年以上たった今、私はやっとその頃の日記を書いているのだ。



絵・フキノトウ／小柳吉次

山菜萸

山菜萸の花を初めて見たのは、小さな幼稚園の庭先であった。木に「さんしゅゆ」と白い札がついていた。たった一度の早春を、そこで過ごしたが、山菜萸が連れてきた春は、ふわっとした明るさで心に残っている。

山菜萸の灯るがごとき輝きに近づきたく
く雨傘さして

花山多佳子 『砂鉄の光』

立春を過ぎても、二月の空は冷たく暗い。その向こうに山菜萸の花が輝いて咲いている。ひとつひとつの花は小さく、真っ直ぐに伸びた枝一杯に花がついている。木の花が咲くごとに一歩ずつ、春が来ている。

頭疲れ出でこしゆふべデパートの花屋に
咲ける山菜萸の花

柏崎駿二 『月白』

さんしゅゆ
山菜萸

デパートの花屋には、きつと早い時期から山菜萸が売られているのだろう。花のついた枝ばかりがどつきりと、生け花用にバケツにいれられて。

鮮けき黄にいち早く山菜萸の蕾ふくらむ
園に来りつ

宮 柊二 『獨石馬』

二月は一年でもっとも、花がひらくのが待ち遠しい月である。あの花が咲くなあ、あの場所にといい出して、見に行くほどだ。蠟梅、満作、山菜萸、連翹。木に咲く黄色の花が目立つ。



猫柳

猫柳は別名、えのころやなぎとも言う。銀白色の花がかわいく、触れれば暖かそうと思わず撫でたくなる。

春のあめ一日ふれば猫楊玉毛ほほけて
露たまりをり

生方たつゑ 『山花集』

ねこやなぎ
猫柳

歳時記によると「春の雨」と「春雨」は少しニュアンスが違うようである。春の雨は三春にわたって言い、春雨はおもに、春の後半特有の雨を言うらしい。春の雨がふわふわとした花を濡らし、滴っている。「猫柳ほうけて水にひたり居り」という虚子の句を思い出した。

猫やなぎ薄紫に光りつつ暮れゆく人はしづかにあゆむ

北原白秋 『桐の花』

日の暮れの光があたり、薄紫色と表現された猫柳は、まるで柔らかな女性のようなのである。射す如く煙るが如き猫柳の岸辺に我執もはかなくて立つ

中城ふみ子 『乳房喪失』

一斉に柔毛の光る束の間を虚しきものに
充りて坐りき

同

『乳房喪失』の巻頭の歌である。一首目の「射す如く煙るが如き」は早春の陽の光を表している。

後の方の歌は、光がさして猫柳の花穂が輝いた、一瞬の美しさを詠んでいる。二つの歌にはどこか、屈折したような悲しさがある。

猫柳はかわいらしい花だが、ぎりぎりの人生を歩み始めた中城ふみ子には、虚しいもの一つになっていた。

(まえだ・やすこ 「塔」会員)